

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(2)

基本的習慣に関する研究

松本 園子

保育者と研究者の共同研究組織、保育問題研究会

(一九三六―一九四三)の活動の中で、今回はこの会で取り組まれた基本的習慣の研究を紹介し、そこから学ぶものについて考えます。前回に引き続き、拙著の内容をベースに、今日的課題との関連を加えて、述べていきます。

一、基本的習慣研究の意義

◇基本的習慣とは

食事、排泄、睡眠、清潔、衣服の着脱などは、人が生きてゆくための基本的行為であり、子どもは誕生後、大人の援助を受けながら、自分の意思と力で

できるように成長していきます。これらは、「基本的習慣」あるいは「基本的生活習慣」と呼ばれます。

しかし、これらは、授乳、離乳、オムツ交換、寝かせるなど、もっぱら大人の側の育児行為として問題にされてきており、「基本的習慣」という概念で、発達と保育の問題としてとらえるようになったのは、さほど古いことではありません。それは、昭和一〇年代に開始された保育学者山下俊郎の研究および山下と保育者たちによる保育問題研究会の実践的研究によって始まりました。

◇保育における基本的生活の位置

乳幼児期は〈遊び〉と〈生活〉の時期であるといいますが、お腹が空いたり、眠くてぐずぐずしていたりして、生活の課題が満たされていない時には遊ばません。生活の土台のうえに、心と身体を働かせ、成長させる遊びが成立するのです。したがっ

て、乳幼児期の保育・育児の第一の課題は基本的生活への援助であるといっても過言ではありません。

子どもを育てる親の悩みの大部分は、基本的生活にかかわる問題です。ちゃんと食べてくれない、なかなか寝ない、眠りが浅く泣いてばかり、おむつがとれない、うんちがでない……このような場合は、子どもは機嫌が悪く、ぐずぐずと付きまるとして疲れた親を悩ませます。そんな状態が高じて、育児ノイローゼに陥り、児童虐待にいたる場合もあります。

よく眠り、おなかも満足し、機嫌のいい時には、子どもは自分から遊びます。大人は、子どもの遊びに引き込まれて一緒に遊ぶ楽しいひとときがもてます。大人が遊んであげることはいいことですが、子ども自身の内部に、遊びを支える生活（生理）的満足がなければ、あの手この手で遊びの相手をして、子どもはのってこないでしょう。

保育施設の保育においても、それは同じです。保

育者は知識と経験を持って
いますから、多くの親より
は「うまく」やれるでしょ

う。また、受け持ちの何人かの子どものなかに生活
がうまくいかない子どもがいても、一人の子どもと
孤軍奮闘している家庭の親ほど追い詰められた状態
にはならないかもしれません。

しかし、日々の保育のなかでは、生活にかかわる
問題はたくさんあり、研究課題は山積みです。

◇基本的習慣研究の意義

ところが、この分野は、保育の内容として、十分
に研究されてきたとはいえません。生活の世話やし
つけは、長年受け継がれてきた、あまりにも当たり
前のことであり、また、その分野の専門家は医師と
考えられ、保育の問題として検討する必要が意識さ
れてこなかったように思われます。

そのことが気になったのは、数年前、保育士養成



課程の「乳児保育」のテキストとして、保育の実践
記録集をつくった時です（松本他編著『実践・乳児
の生活と保育』二〇〇一、樹村房）。その仕事の中
で、私は、基本的生活に関わる保育現場の研究的取
り組みが、遊びのそれに比べて手薄であると感じた
のです。

私もは、この本のために、各種の保育雑誌に掲
載されている三歳未満児保育の実践記録を収集しま
した。この時、遊び関係の記録はたくさんあるの
に、生活にかかわるものがなかなか見つからず困っ
たのです。結局、食事や排泄に関する保育実践記録
を、何人かの知り合いの保育者に新たに書いてもら
い、掲載することになりました。生活にかかわる内
容は、実際には保育時間の多くを占めており、トラ
ブルも多い部分ですが、研究会や、実践記録のテー
マとしては、あまり魅力がないのかもしれませんが。

しかし、基本的生活の分野には、解決を必要とす

る保育の問題が無数にみられます。とりわけ、環境の激変のもとで、子どもたちの生活リズムの変化や乱れが問題になっている今日、日常的な生活の部分にもっと光を当てて、保育の問題として研究を進めなければならぬのではないのでしょうか。

二、戦前期の保育における基本的生活

さて、保育問題研究会のころ、つまり戦前期の保育施設における基本的生活の位置付けはどのようなものであったでしょう。

当時の保育は、一九二六（大正一五）年に制定された「幼稚園令」に拠っていました。

幼稚園令施行規則に規定された保育項目は、遊戯、唱歌、観察、談話、手技等、であり、基本的生活にかかわる項目はありませんでした。

幼稚園の場合、保育時間は短く、家庭における育児によって基本的習慣がほぼ自立していることを前

提に入園していました。お弁当の見守りや、お漏らしの始末なども時にはあったでしょうが、保育の内容として研究を要する切実性はさほど強くはなかったかもしれません。

ところが、保育所（当時は制度がなく、託児所と呼ばれることが多かった）ではそうはいきません。

三歳未満の子どもも多く受け入れていましたし、朝から夕方まで長時間の保育であれば、年長児にも基本的生活にかかわるいろいろな課題が出てきます。

したがって、保育所保育の大きな部分を基本的生活への援助が占めていましたが、これについての指針はなく、それぞれの保育者が、自分の経験と判断ですすめざるをえませんでした。

こうした中で、保育問題研究会が基本的習慣を共同研究のテーマとして取り上げたことは画期的なことだったのです。

三、基本的習慣に関する山下俊郎の研究

基本的な生活についての科学的な研究が乏しかった時代、これに注目して研究に着手したのが山下俊郎です。

山下は基本的習慣の実態について、わが国で初めての大規模な調査に取り組みました。それは、一九三五（昭和一〇）年十一月から翌三六年一月にかけて、五六〇人余の児童（〇〜七歳）を対象に実施した調査です。食事、睡眠、着衣、排泄、清潔の習慣について保育担当者（主として母親）に質問法（または質問紙法）により行われました。

山下がこのような調査、研究に取り組んだのは、食事、睡眠、排泄、着衣、清潔整頓などの基本的習慣は幼児期の児童に欠くことのできない重大な教育の一項目であるという認識からでした。欧米の児童教育に関する著書には、このような基本的習慣につ

いて、必ず相当の頁数が割かれているのに、当時のわが国の児童心理学、児童教育に関する書物では、取り上げたものはなかったという事です。⁽²⁾ そのため彼は、幼児の基本的習慣教養（教えそだてる）の時期の標準をわが国の生活実態に即して設定しようと試み、上記の調査を実施したのです。

調査結果から、基本的習慣の各項目について、わが国の児童の標準がまとめられました。この標準については、今日でもしばしば引用紹介されますし、山下の研究の集大成⁽³⁾も出版されていますので、詳しくはそちらをご覧ください。

四、第二部会における基本的習慣の研究

◇第二部会の活動

保育問題研究会には、次の七つの問題別研究部会が設置され、それぞれが、毎月一回程度の研究会を開催していました。

第一部会 保育の基礎的な問題

第二部会 幼児の保健衛生

第三部会 困った子供の問題

第四部会 自然と社会に関する観察

第五部会 言語

第六部会 遊戯と作業

第七部会 保育関係の政策的諸問題

第二部会は一九三七年五月にスタートし、おやつの問題、幼児の衛生習慣の問題など取り上げていました。十月の部会では、ゲストの山下が「幼児における基本的習慣の研究」について報告しました。

山下は、先に述べた調査を実施し、その結果の整理、検討をすすめつつある時でした。彼は、整理済みの食事、睡眠、排泄、清潔について各年齢においてついでにすべき習慣の標準を示し、保育が手技や遊戯を教えるのみであってはならず、幼児の全生活を指導することではなければならぬことを強調しまし

た。

◇発達の（標準）の意義と問題

基本的習慣の自立時期の標準は、たとえば排泄について、一歳で排尿事後通告、排便事後通告、一歳六か月で排尿予告、排便予告、といったものでした。これは保育を進める上で有益でした。保育における全体の指導計画をたてるためにも、個々の子どもの指導の方針を考えるためにも、客観的標準が必要でした。経験のみに頼る手探りの保育に悩んでいた保育者たちは、発達の標準の提示を喜びました。

戦後の発達研究の進展により、今日では発達の各側面の標準はほぼ出揃っています。しかし、標準が、過度に強調されれば、個々の子どもの生活と成長が「標準」によって評価され、親や保育者の子どもを見る眼を歪ませます。今日ではそうした弊害がしばしばみられ、むしろ標準にしばられることの弊害が強調される傾向があります。

しかし、今日的感觉で発達の標準の意義を軽視し、あるいは否定することも誤



りです。へ標準への意義と限界について、原点に立ち返って考えてみる必要があると思います。

◇基本的習慣の共同研究

さて、一九三八年より山下が第二部会のチューターとして参加することとなり、部会のテーマは幼児の基本的習慣の研究を取り上げ、生活訓練の問題を根底的に解明すること、とされました。

部会での研究の方法は、食事、睡眠、排泄、着衣、清潔の五つの習慣のそれぞれについて、二回か三回の研究会をあてました。最初にチューターの山下が問題の心理的解明、実例による方法的指示などを行い、次の回には、部会メンバーが幼稚園、保育所の集団的生活場面で視察した事項を持ち寄り、チューターとの共同研究により解決をはかる、とい

う方針がたてられました。それにより、さらにこの問題についての標準を樹立してゆくことがめざされました。

研究はほぼ、当初の方針どおりにすすめられ、多くの記録が部会で発表されました。

例えば、秋田美子（当時、東京市向原方面館保姆）は、弁当箱からご飯をかきこむ六歳児が、著の持ち方を指導することによって上手に食べられるようになった例を、庄司竹代（同、赤坂方面館）は、午睡のとき、いつまでも寝ようとしない幼児に、さまざま働きかけを試みた例を報告しました。

第二部会の熱心なメンバーであり、当時明石町方面館に勤務していた阿部和子は、私に第二部会での経験をつぎのように語ってくれました。

今でも覚えているのはね、排泄の習慣ってこ
とでね、なかなかトイレに行って排泄しない子
どもがいたの。おむつ取るのがなかなか難し

かったんだけど、トイレで他の子どもたちがおしっこしたとき、なかなか習慣のつきにくい子どもが偶然ちよこちよこ走ってきたわけ。それで、他の子どもがおしっこしてるとこを、じつと見てたの。そしたらね、その後でその子どもにトイレさせたらいとも簡単にできてきたわけ。

あ、これだって思つてそういう記録を書いて発表したの。そしたら、山下先生にうんと讃められたのを覚えてるんですよ。そういうふうには、実際によつて学んでいくというのが非常に新鮮で、私としては熱心にやりましたね。

(一九七七年八月二十六日、阿部和子談、聞き手：松本)

*

保育問題研究会は、保育のさまざまな分野について、日常保育の中でぶつかる問題を、取り上げ、共同で検討し、解決の方法について考え、それを実行

し、その結果を持ち寄り検討する、という地道な共同研究をすすめました。基本的習慣に関する研究もそのひとつでした。今日の子どもの状況、保育の問題の方向を考えるうえで、やはりこのような地道な研究の積み重ねが必要であると考えます。

(淑徳短期大学)

引用文献

- (1) 松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会——保育者と研究者の共同の軌跡／一九三六—一九四三』二〇〇
- 三、新読書社 第二部 第一章 第一節「基本的習慣」
- (2) 山下俊郎「幼児に於ける基本的習慣の研究」『教育』一九三六・四、四卷四号
- (3) 山下俊郎『幼児の生活指導』一九七〇、フレールベル館
- (4) 前掲拙著、巻末資料「担い手たちの証言」6、阿倍和子証言